

石膏像がうずくまり、こめかみに拳銃を当て、パンと発砲した。頭に被っていた白いバケツに穴が開き、少しの血だまりが、足元にできていた。

私はとりたての野菜を仕分けて、子どもとその友人に持たせようと、袋詰めに焦っていた。彼らはすでに自宅を出て、矢川駅に向かって歩いていた。追いつくために自転車のペダルをこいで、人気のない坂道をもどかしく登っていた。一人の完全武装の兵士が坂を歩いていた。鉄兜には網がかかっていた。彼を追い抜いて、横道に入った途端、パンという音に驚いて後ろを振り返った。白い石膏像が赤く濡れるのを見たが、電車の発車時間に遅れまいと駅への道を急いだ。早暁の夢から覚めたたたんに思いに沈んだ。

自己個人に最も関心をもって生きてきた。毎日、いつも自分がどうすると考えていた。きっと少年のころから、情緒的にはそうだった。いまでは個人主義的な自律こそが人生の目標だと論理で考えている。現代の人は孤独で、とても寂しいように見える。私が個人主義を唱道しながら、寂しくないのは、家族や友人たちがいるからだ。個人主義はむやみに仲間や名利を求めなくても、孤独ではなく、寂しくもない。自己個人に深くこだわることが、家族や友人、地域社会や大きくは世界に思いを寄せることにつながっているのなら、利己主義に墮することもない。今にして思えば、すでにこの世にいない祖父母や両親（義父母も含む）にも、多くの老師たちにも、どれほども限りなく育てていただいたのだろうか。遅ればせながら、今にして次第にそのことが分かってきた。

孤独に生きられるだろうか。競争、闘争ばかりの世界では、孤独の果てに疲れてしまう。たとえ、個人主義が意思して志を高く掲げたとしても、疲れた時はゆっくり休めばよいのだ。無条件な癒しがあってよく、それは信仰によるしかないのだろう。とはいえ、大いなる社殿、伽藍や聖堂など、拝殿の清楚なしつらえの奥の暗闇、祭壇の煌びやかな御仏、壇上の眩いキリスト像とステンドグラスなど、あるいは聖職者の厳かな權威や豪華な礼服など、こうした物事からの癒しではない。人々が歩いた石畳のくぼみ、手を触れて磨かれた聖像、無数の小さな献灯ろうそく、神聖な形を包んでいる人々の祈り、見えない「精霊」、あるいは自然に充溢する天神地祇の気、こうした聖なるものに寄り添い信仰することによって、たぶん孤独は癒されるのだろう。